

交通手段の不足が悩み

児玉谷史朗

中間技術の欠如　おそらくアフリカの交通の特徴の一つは、他の途上国で現在みられ、あると外貨不足　いは、先進国で過去にみられたような中間的な交通手段——自転車、人力車、サイクル・リキショー、馬車、牛車など——がなくて、徒歩という最も基本的な交通手段（？）か、自動車という最先端の交通手段か、という両極端になっていることだろう。しかし、現在のアフリカの技術的・経済的水準では自動車の本格的な生産は不可能であるから、完成車を輸入するか、組立をする場合でも部品ほとんどを輸入することになる。つまり重要な交通手段が輸入に大きく依存しているわけである。なんらかの事情で輸入が困難になると、交通に大きな影響がでる。現在ザンビアの交通・運輸が直面しているのは、まさにこの問題である。

一九七〇年代半ば以来、輸出の九割を占める銅の価格低落、輸入価格の高騰、対外債務の増加によって、近年外貨事情が悪化しており、輸入は困難になっている。これが交通事情の悪化を招き、それが今度は経済・社会のいろいろな面に影響を与えている。



カヌーは今でも一部の農村の重要な交通手段
(ザンビア、チアワ地区 写真：小倉充夫)

国土が広く人口密度が低いことが交通・運輸の困難をいつそう強める。ザンビアは日本の二倍の面積の国土に七百万の人口という人口希薄な国である。この広い国土に、鉄道は国の中央を南北に走る国鉄が一本とタンザン鉄道があるだけで、陸上交通の主力は道路交通なのである。

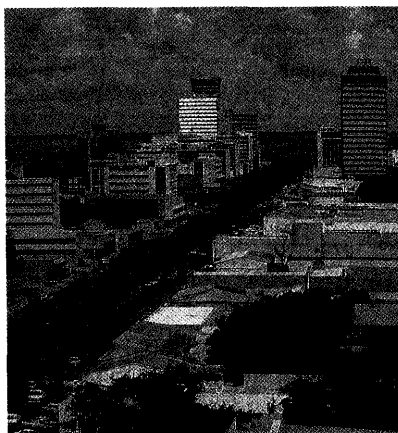
農業に与える影響

農業に対する影響で最も深刻なのが農産物の集荷と農業投入財の供給である。ザンビアは単に国土が広く、人口密度が低いだけでなく、都市化率が高い。したがって人口希薄な農村から農産物を集荷して、都市へ運ばなければならぬ。広い農村に分散する農民に肥料や種子を都市から配布しなければならない。それなのに、トラックやタイヤその他の部品の不足で肥料や種子が農村に届かない、せっかく収穫された農産物が集荷できない、といった事態がこのところ毎年のように繰り返されている。

農業普及指導も広い範囲を巡回しなければならないのに、交通手段が不十分なために指導員が思うように動けず実質的に開店休業状態である。

市内交通の 首都ルサカ市内の公共交通機関はバス、ミニバス、タクシーである。バス主力はバス 交通はUBZ (ザンビア連合バス会社) という国営のバス会社が運行を担当することになっている。しかし経営の悪化によって同社は一九八八年頃まではほとんど破産状態であった。筆者がザンビアに行った八六年には市内にはUBZのバスはほとんど走っていないからので、最初UBZというバス会社があったのに気がつかなかったほどである。

そこで市内の公共交通機関の主力は民間業者の運行するミニバス、タクシーということになる。民間業者の持つ大型バス(二階建てバスも含む)もあるが、その数は非常に少ない。ミニバスは日本でいうマイクロバスのことで、日本製が多い。しかしここ二、三年の通貨切下げによる輸入価格の高騰と外貨不足で自動車やスペアパーツを輸入するのが困難になっ



LUSAKA AND ITS ENVIRONS Edited by GEOFFREY J. WILLIAMS

ルサカ市のメインストリート (Zambia geographical association handbook No. 9 より)

てきたために、頼みの民間バス、タクシーも十分な運行台数を確保できなくなってきた。その結果、市内の交通難は深刻になってきた。

ある朝、大学の近くの幹線道路を車で走っていると、都心とは逆に郊外の方へ向かう側のバス停に人々がたくさん並んで待っているのに気づいた。このあたりに来る時にはすべてのバスが満員になってしまい停車してくれないので、人々は反対方向のバスに乗ってバスの始発まで行かなければならないのだ。

また、バスが不足してきてから従来のように支線の道路にはバスが来なくなったので、幹線道路から離れたところに住む人々はバスの通る道まで三〇分から一時間も歩かなければならない。当然通勤時間は長くなり、遅刻も増える。夕方はみなバスに乗り遅れまいとするために終業時間の前に帰ろうとする。

トラックもヒツ ザンビアの市内バスで感心したのは、これだけ公共交通機関が不足しているにもかかわらず、**交通手段** ながら、けっして定員を大幅に上回る乗客を詰め込まないことである。乗合タクシーも五人までしか乗せない。ケニア、タンザニアではバスやタクシーに多数の人が乗り、あふれた客が車の外側にぶら下がっているという光景をよく見たが、ザンビアではそういう光景には一度もお目にかからなかった。

そのかわり、トラックの荷台に人をたくさん乗せて走っているのはよく見た。アフリカ人にとって葬式は大切な行事だが、この葬式や埋葬に立ち会うために墓地に行くときなどに職場の同僚

や親戚が大勢移動する。そういう人々が多数トラックの荷台に乗って歌を歌いながら移動する。葬式以外でも、軍隊のトラックなどは軍事輸送よりももっぱら軍人でない人々の移動に使われているという感じであった。

認可・登録を受けずに乗客輸送をする白タクのようなものもあるが、組織的なものはそれほど多くない。自家用車を持つ個人や会社の運転手がアルバイトとして客を乗せて金をとる程度である。そのかわり、ヒッチを求めることは多い。知り合いであればもちろんのこと、知り合いでなくても車に乗せてあげることがよくある。通学する中学の生徒たちが、ヒッチを求めて道路の交差点に大勢立っている姿は、ルサカでよく見る光景である。

(こだまや しろう／アジア経済研究所アフリカ総合研究プロジェクト・チーム)